

都大路を歩く

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



長岡京東二坊大路（北から）路の両側の溝が、さながら遠近法のお手本のようにまっすぐ伸びていく。

碁盤いすばんの目によく例えられる京都の町割りは、まっすぐな道路とそれに囲まれた方形の区画が特徴です。ですから、角を同じ方向に4回曲がれば再び最初に向いていた方向に戻ることになります。こうした特徴的な京都の町割りは、実は平安京で採用された条坊制という制度が元になっていることがわかっています。

人類が定住生活を始めて以来、集落と集落とを結ぶ道は、川や丘に沿った曲線の道でした。集落の中の道も家々や田畑をつなぐ小道でした。しかし、一元的な全国支配を目指した律令国家は、自らが定めた長さや面積を元に土地を四角に区画し、そこに直線の道を通したのです。これが農地にあっては条里制、都城にあっては条坊制

とよばれる制度です。もちろん、こうした自然を無視した制度が、全国に貫徹したわけではありません。しかし、当時の首都にあたる都城では厳格に実施されていたと考えられます。

平安京内の様子は発掘調査の進展により少しずつわかってきています。大路や小路は限られた面積の調査では全容がなかなかつかめ



平安京朱雀大路復元模式図



七条大路の石敷路面と七条通 (南東から)



四条坊門小路と七条通 (東から)

ません。しかし、各所で積み重ねた調査の成果をまとめてみると、平安京の造営当初はまっすぐな路が計画通り厳密に施工されていたことを裏付けることができます。

折りしも、長岡京の調査で平安京の西洞院大路にあたる東二坊大路を幅いっぱい調査することができました。大路の両側の溝と溝との間は約25mで、現在の烏丸通とほぼ同じ幅になります。調査で出てくるのはただの平坦な面ですが、こうした京内の路を牛車や騎馬の武者が行き交った姿を想い描くことは許されるでしょう。なかには牛車の轍の跡や裸足の足跡がみつかった調査もあるのです。

平安京で最も広い路は、朱雀大路です。幅は28丈(約84m)もありました。平安宮と羅城門をつなぐこの大路は今日の皇居の二重

橋と東京駅をつなぐ道路に当たるわけで、平安京と外とを結ぶ羅城門はさしずめ東京駅に当たるでしょう。朱雀大路に次いで17丈(約51m)・12丈(約36m)・10丈(約30m)・8丈(約24m)の大路があります。平安京では小路でも4丈(約12m)あり、私たちの生活実感からみれば、京内の路は広すぎるという印象を受けざるを得ません。

実際、このように一見整然と計画された平安京の路も、どうも生活をしている人々、特に庶民にとっては路として利用するには勝手が悪かったようです。『熊鬼草紙』という絵巻物には、人々が道端で大便をしている様子が生々しく描かれていますし、朱雀大路の側溝からは人骨さえ出土したことがあります。都の中心の道路に埋葬が

行なわれたのでしょうか。

また、平安時代の後半になると、不必要に広い路は実際の役に立たず、庶民が馬を放牧したり、畑を耕作したり、さらには家まで建てていたことが当時の禁令などの史料からわかります。やがて非合法に占拠された、本来は路であった土地は私有化され、財産として売買されるようになりました。こうして京内の道は同じ場所を踏襲しながら、徐々に道幅をせばめていきました。事実、市内各所の発掘調査で平安京の路を踏襲した通りの地下に平安京の路が埋まっていることを確認しています。そして、豊臣秀吉による町組の改造を経ながらも、江戸時代にはだいたい現在の道幅で落ち着くに至っています。向かい側の家の人と声を交わせるほどの道幅が本来の町中の道の広さなのではないでしょうか。

1200年にわたって平安京・京都の町並みは人々の営みによって刻々と姿を変えてきています。ひょっとすると自動車道路の整備・拡幅が行なわれ、高層ビルの建設が進む今日は、京都の町にとって立体的に町並みが変わっていく大変動の時期なのかもしれません。

(山本雅和)



西六条大路の路面 (北から)

牛車のものだろうか、うっすらと轍の跡が残っている。